

巻頭言

アフターコロナでの作業療法教育学会の重要性や責任

目白大学 小林 幸治

2019年度の第24回日本作業療法教育学会は台風19号、新型コロナウイルス感染症の影響により、一度は延期、二度目は実行委員会で繰り返し検討した結果、オンラインでの演題発表へと変更させて頂いた。それにもかかわらず、50名を超える参加者に演題発表へ参加して頂くことが出来、この学会への期待を強く感じた。また、その後全国緊急事態宣言を経て、多くの学会や研究会がオンライン活動を行う様子を目にして、選択した方向性に間違いは無かったと考えている。

ところで、作業療法のパラダイムは時代を経て変化しながらも、人・作業・環境の関連性を捉え、作業に基づく実践を深める方向に進んでいると思われる。しかし、理念や理論と実際の狭間をつなぐ役割をもつ作業療法教育には、ますます多くの課題が挙げられる。現在指導中の大学院生が進めている研究では、当の領域において対象者理解を行うための枠組みが未確立である理由の1つに、養成教育の問題があるという回答があった。また厚生労働省指定臨床実習指導者講習会が行われているが、形だけクリニカル・クラークシップ（CCS）を進めようとする傾向があるという声が聞かれる。CCSに基づく臨床実習指導方法論の定着にはまだ時間が掛かると言える。そして今年度は新型コロナウイルス感染症予防により、全国の養成校で臨床実習が中止となり学内での代替教育プログラムが手探りで行われている。筆者はあらためて臨床実習指導者の役割や重要性を痛感しており、教員の見方や臨床思考を学生へ伝える難しさを日々感じている。ただ、この経験から、これからは養成校と臨床実習施設が養成教育・臨床実習・卒後教育を「ともに作って行く」ことを、オンラインを活用しながら行っていく方法を探ることになるだろう。

それに対し、筆者は、養成校教員、臨床実習指導者ともに実務教育者として「専門的知識や技能」「指導方法などの教育的知見」「対象者や学生との相互作用および環境の活用」という3つの側面が求められることを指摘した^{註)}。そのために、今後さらに養成校教員、臨床実習指導者が学びあい、学び続け、意見交換を活発にする場として、教育関連の学会や研究会に求められる役割が増えると考えている。こうした学会や研究会は、求められる役割を意識し、会員の声を聞きながら、その内容を分解して検討・整理し、さらに組織作りに努めていく必要があるだろう。

註) 小林幸治：これからの作業療法臨床実習－クリニカル・クラークシップに基づく重点的な課題への取り組み方。OTジャーナル54(7)：618-623, 2020.